第15回愛媛大学考古学研究室シンポジウム

弥生時代凹線文期（第Ⅳ様式）の遺跡形成と環境変動

愛媛大学考古学研究室が発掘を行っている宮ノ浦遺跡（上島町佐島所在）では古墳時代前期の製塩遺構がクロスナ層に伴うことがわかり、温暖期と製塩活動との関連性を明らかにしました。また白色砂層をはさんでその下から弥生時代中期前半の自然クロスナ層を検出しました。芸予諸島では、一方で弥生時代中期後葉（凹線文期）の海浜遺跡は極めて少なく、低丘陵上あるいは「高地」の占地を指向します。そしてまた後期中葉以降古墳時代前期にかけて海浜地域の占地に変わります。このような占地の変化は海浜地域での砂丘形成とその動因としての環境変動（寒冷化・温暖化）に起因するものと考えられます。しかし全ての海浜地域が砂丘形成や環境変動に翻弄されるわけではないため、地域によって海浜遺跡の展開も異なります。

今回のシンポジウムでは、芸予諸島での弥生時代凹線文期における遺跡の再検討を機に、西日本各地の臨界性遺跡が環境変動とどのような関係を有しているのか、という点について議論したいと思います。

日　時；
2016年2月27日(土)・28日(日)
27日　12時 受付開始
13時～17時
28日　9時30分～13時

会　場；
愛媛大学城北キャンパス
愛大ミューズ M24号教室
（２階）

入場無料

ご参加の場合は事前に下記までご連絡ください

790-8577 松山市文京町3
愛媛大学東アジア古代鉄文化研究センター
Email: kotetsuAIC@gmail.com

《　内　容　》

村上恭通（愛媛大学法文学部）
臨海遺跡の形成と環境変動―芸予諸島を中心として―

柴田昌児（愛媛大学埋蔵文化財調査室）
今治平野と松山平野の遺跡群と臨海性集落

栗林誠治（徳島県埋蔵文化財センター）
凹線文期の遺跡動態-徳島県吉野川流域-

田畑　直彦（山口大学埋蔵文化財資料館）
周防・長門における弥生時代凹線文期の遺跡と環境変動

河合　忍（岡山県古代吉備文化財センター）
岡山平野における弥生集落の動向
－足守川下流域の中期から後期前葉を中心として－

河合章行（鳥取県教育文化財団調査室）
鳥取県における弥生時代中期後葉の遺跡形成

田中清美（大阪文化財研究所）
弥生時代中期後葉～後期前葉（Ⅳ様式後葉～Ⅴ様式前葉）の河内湖岸の環境変動と土地利用」

瀬谷今日子（和歌山県立紀伊風土記の丘）・田中元浩（和歌山県教育委員会）
紀ノ川流域(紀伊地域)における集落立地の変化

八木宏明（愛媛大学大学院）
古墳時代における臨海遺跡の生産活動と環境変化
―愛媛県上島町宮ノ浦遺跡を中心として―

信里芳紀（香川県埋蔵文化財センター）
備讃瀬戸における弥生中期後半期の集落動態＜紙上参加＞

宮ノ浦遺跡と燧灘の島々

宮ノ浦遺跡古墳時代前期クロスナ層

宮ノ浦遺跡弥生時代中期自然クロスナ層と土器